



『問題はロシアより、むしろアメリカだ ～第三次世界大戦に突入した世界』

エマニュエル・トッド 池上 彰 著／大野 舞 (通訳)

朝日新聞出版 刊

定価 869円 (本体 790円+税)

終わりの見えないウクライナ戦争について、エマニュエル・トッドと池上彰とがオンラインで対談した。本書は、3日間で計8時間に及んだという「緊急対談」の書き起こしである。

欧州を代表する知識人として知られるトッドは、ソ連崩壊などを予見したフランス生まれの歴史人口学・家族人類学者だ。かねてから「第三次世界大戦はもう始まっている」と唱えるトッドに、ジャーナリストの池上が「こんなことを話すのは、今日が初めて」と言わせ、「新しい思考」を引き出している。

ロシアのウクライナ侵攻を、「狂ったプーチンが始めたこと」のひと言で片づけていいのか。中立を貫く学者の矜持を賭けて戦争の深層に迫り、上記の問いを複眼的に読み解くトッドの慧眼が、読者にオルタナティブな世界観を提示する。

プーチン・ロシアはもちろん悪い。

しかし、「この戦争はアメリカやNATOの対応次第で、つまり『ウクライナの中立化』というロシアのかねての要請を西側が受け入れてさえいれば、容易に避けることができたかもしれない」と説く。そして「アメリカは『ロシアとの代理戦争』を、ウクライナを舞台に戦っている。最大の被害者はウクライナ国民だ」「アメリカというのは『他国を戦争に向かわせることをする国』だ、とも言える」「アメリカがロシアに対してする批判は、まるで自分がしてきたことをしている相手に対しての批判」ととらえることもできる、とトッドは続ける。

このように唱えるゆえんを全5章で明かす。「的確な質問を的確なタイミングで私に投げる」池上の「振る舞い」で、「新しい思考が泉のように湧き出てくる」と記すトッドをして、「この世界からアメリカという勢力がなくなれば、より美しい、より平和な世界が現れるだろう」と言わしめる現実を、さてどう考え、どう受け止めるか。(山海野 玄)